

1. 現代高校生の家庭観

現在、子供を産み、育てる中心的な場となっているのは“家庭”である。これからリプロダクションを経験してゆく青年たちは、家庭についてのどのように考えているのだろうか。福富・松井ら(1992)の東京50キロ圏内の高校生を対象としたサンプリング調査によれば、現代高校生が望む生き方として、女子では「家庭を大切にする」(68%)が群を抜いてトップである。それに次ぐのは「子供とよく遊ぶ」(55%)であり、この2つに比べると、他は少ない。女子が家庭を重視していることがわかる。また、男子でも最も望まれているのは「家庭を大切にする」(58%)である。次いで「仕事と家庭を両立させる」(46%)、「子供とよく遊ぶ」(45%)、「自分の楽しみを追求する」(45%)、「金持ちになって豊かに暮らす」(45%)が並ぶ。男子においても家庭の生活が重要視されており、「仕事をバリバリこなす」(31%)などは上位に入らない。

現代青年は家庭生活の幸福を中心に生きようとしているようである。また、男女ともに「子供と遊ぶ」が半数程度にあげられていることは、彼らの幸福な家庭生活のイメージ中に、子供の存在が重要なポイントのひとつとしてあるということであろう。さらに、多変量解析を用いた分析の結果、女子の場合、家庭や子供を中心に生きることと、楽しく生きることが少なからず同一視されていることが明らかになっている(福富・上瀬ら, 1992)。これは、女子の家庭志向が特に積極的なものであることを示している。

彼らの家庭志向を支持するように、彼らは結婚に対しても、「幸せ」(61%)や「あたたかい」(45%)という明るく肯定的なイメージを強く抱いている。少なくとも高校生の時点においては、結婚について積極的である。

また、女性の就業観をみると、男女ともに「子供ができたなら一時やめて、子供の手が離れたらまた職業をもつ」(男子27%;女子43%)を理想とする者が最も多い。これは「子育ては母親の手で行う」という発想の強さを示す結果と考えることができる。これに対し、「結婚しても、子供ができて、職業をもち続ける」(男子11%;女子11%)は、1割にとどまり、「結婚退職」(男子21%;女子19%)や「出産退職」(男子15%;女子14%)よりも、さらに少ない。女性の就業観において「出産」がどれだけ重要なポイントとなっているかがわかる。

以上、現代高校生は、結婚し、子供をつくり、家庭を大切にすることをかなり積極的に望んでいるといえよう。

2. 現代高校生の神秘観

では、結婚や子供や家庭を求める者が多い現代青年たちは、“人間の生命”についてはどう考えているのだろうか。“科学技術”が親子のつながりの意味づけについて、強く再考を求めてきているような現在、青年たちは、霊の存在や、生まれ変わり、死後の世界などを、過去の迷信としてとらえているのだろうか。

福富ら(1992)の調査によれば、現代高校生で、「宗教に関心がある」(男子9%;女子6%)のは1割に満たず、多くはない。しかしながら、この結果は、青年たちが神や霊魂の存在を否定していることを意味してはいない。“生命”に関連する神秘現象を信じる者の割合をみると、「霊」(男子42%;女子50%)については半数近くがその存在を信じている。また「前世の存在」(男子21%;女子32%)や「死後の世界」(男子29%;女子30%)や「神仏の存在」(男子26%;女子28%)についても3割がその存在を信じている。こ

の結果は、単刀直入に信じるかと尋ねられての回答であるから、潜在的、消極的に、こうした神秘現象を否定できない若者はもっと多いであろう。

この結果が示していることのひとつは、現代青年が人間の生命について考えるときに、霊魂や前世、死後の世界の存在を考慮に入れることが、珍しくないであろうということである。彼らは、リプロダクションにまつわる事象をとらえる際にも、生まれてくる生命の意味や、その生命と自分との関係の意味を、神秘的な感覚からも問うと思われる。

一方、生殖技術などを発展させている「科学」に対しては、限界観をもつ高校生が多い。「世の中には科学ではわからないことがたくさんある」（男子56%；女子60%）や「科学の進歩がいつもよい結果をもたらすとは限らない」（男子63%；女子63%）といった科学に対する疑問視を6割がしている。逆に「科学が進めば、すべての問題を解決する」（男子5%；女子4%）という科学万能観をもつ者はほとんどいない。

科学への絶対的な信頼が消えていることは、むしろ健全なことであり、現代では良識的であるといえるかもしれない。実際、科学限界観をもつ若者のほうが、家族や教師や友人との関係もよく、環境問題や国際問題にも積極的な者が多い。しかし、さらに、この科学限界観をもつ高校生ほど、霊、神仏、前世、死後の世界を信じていることも明らかにされている（松井ら，1992）。霊や神仏を信じる青年たちは、決して社会的に特異な人間ではなく、むしろ、世の中に適応した良い子に多いのである。

さらに、この霊や神仏を信じる神秘的傾向と、前述の家族志向との関係をみると、家庭を大切に生き方を望む高校生は、男子では「神仏」と「前世」、女子では「死後の世界」を信じる者が多かった。家庭志向と神秘志向とは、重なりあうものなのである。このような結果は、生命観が生き方に影響を与えることを示唆するものであろう。

以上、現代高校生においては、霊や前世や死後の世界といったものが奇異なものではなく、むしろ社会的に適応した青年たちによって信じられているものようである。

こうした家庭志向、神秘観をもつ青年たちは、これから実際にはどのような生き方をし、家庭や子供に対してどのような態度を示すのであろうか。特に、個人の生命観が、生殖技術の問題と出会ったときに、どのような解釈や判断を見出そうとし、どのように影響を受けるのかは、重要な課題となろう。なぜなら、生をどうとらえるかは個人の自己の形成、ひいては人生の形成において極めて重要な位置にあるからである。たとえば、AIDSによって生まれた人にとっては、親子の意味や自分の生命の意味の形成が、非常に大きな課題となりうる。他の家庭なら単なる親子喧嘩ですむ出来事ですら、自己の意味をつらく問いかけるものになるかもしれない。自分の存在の「意味」を本人が納得するまで、そうした葛藤は続く。自己の生の意味づけは、生得的な欲求であるといってもよいくらい強いものであるからである。

そうしたことを踏まえた上で、人々が生命の意味をどのようにとらえ、どのような生き方を望んでいるのかを、今後、より丹念に研究していく必要があると思われる。

福富護・上瀬由美子・松井豊・加藤千恵・上野行良・上田康子 1992 高校生の理想の生き方—現代高校生の生活意識(1)— 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 235.

福富護・松井豊・加藤千恵・上野行良・上瀬由美子 1992 現代高校生の生活環境 (株)ライフデザイン研究所

松井豊・福富護・上野行良・加藤千恵・上瀬由美子・上田康子 1992 高校生の科学観と宗教への関心—現代高校生の生活意識(4)— 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 238.